

砕かれた言葉は、やがて結晶化する

長縄 宣

閉ざされた本、掻き消された文字、切り刻まれた辞書…。大地の奥深くに沈みゆく化石となった言葉のように、セシルは喋りすぎた言葉たちを、美しき結晶として沈黙の内に眠らせようとしているのか…。いやセシルは、眼に見えるすべての物事が、言葉によって意味を背負わされる以前の、自ら発する魂の叫びのような言霊を蘇らせたいのかもしれない。発せられた言葉、書かれた文字は、伝わらなければ意味を成さない。うわべの解釈で伝えるべき真意を取り違えた時、言葉は誤解され、意思疎通できない不自由なものとなる。自由にならない言葉…セシルは、言葉につきまとう不治の病から言葉自身を解き放ちたかった。

言葉を再生する—その内に秘められた真なる力を蘇らせたい—一心で、作家として強い意志を持ち、あえて言葉の意味を剥ぎ取ろうとした。セシルの手を介して、言葉は語らない文字となり、意味を成さない記号となり、記号になる以前の原初的な粒子となって、造形的な形に還元されていくのだ。素材の質感と美しき色彩を伴い、新たな造形美を語り出す言語となって、本でもなく原稿用紙でもない空間に置かれ、見る人々にセシルの意図した謎を解かせようとする。

セシルが作品に込めた謎解きとは、世界に共通する造形的言語を作り、我々にとっていかに言葉が大切であるかを問うことにある。意味を剥ぎ取られ物質化した文字は、あくまでアートを形作るための素材として扱われる。それは、アートの中で意味を成す記号として、解体された言葉の残像を用いているということなのかもしれない。セシルの作品を紐解く鍵は、その残像を我々の心の眼で再生し、結晶化したアートの言葉として読み解くことだろう。

そして言葉ばかりではなく作品を設置する建築空間も、セシルの造形においては重要な鍵となる。インスタレーション作品の多くが、窓や壁、床の形状と違和感なく連鎖しているのは、その空間の特徴や歴史的意義を、アートの記号として作品の中で再構成しているからだ。

今回その場に選ばれた伊豆の「知半庵」は、江戸時代に建てられた和風の民家である。三部屋の座敷には、家の歴史を物語るものを写し取った紙がシュレッターにかけられ、人の心を招き入れる柔らかな敷物のように二畳分の正方形に敷き詰められた。稚児に着せた赤い着物の柄、短歌を詠んだ短冊、家主の遺言状…セシルの作品は、家にまつわるものたちの魂を一度裁断することで鎮め、土を耕すように大地へと還元しながら、歴史ある家の活力を呼び覚ました。それは言葉なき静謐な空間として、輪廻転生のように繰り返される人々の、生から死へと巡る悠久の時の流れを見つめている。

さらに、裏庭の竹藪に興味を抱いたセシルは、竹と混在する杉と檜に、こぶ状に芽生える作品を、あたかも文章の合間に付された「…」のように設置した。もの言わぬ樹々たちの間合いを、そこに宿る精霊が発する「言葉にならぬ言霊」として表現した。シンプルな丸みを帯びた形状こそ、セシルが望む言葉の魂としてあるべき姿なのかもしれない。

人は短い生と死の狭間で言葉に人生を託し、受け継ぐべき人へとその意味を語り継いだ。先人の知恵が記された歴史は、多くの言葉が積層した大地のようなものだろう。セシルは文化の違いを越えて、広大なる肥沃な言葉の大地を、アートを通して耕そうとしている。かつてセシルは語ってくれた。フランス語で「culture」とは、大地を耕す「農耕」という意味と、精神を豊かにする「文化」の二つの意味があると…。生命の糧を得るために耕すことは、同時に精神を耕す文化や芸術を育むということでもあるのだ。そしてここ知半庵という、歴史と文化が息衝く場で、セシルが言葉を耕し、植え付けたアートの種が、訪れた人々の心に新たな「culture」という精神を芽生えさせてくれることを願わずにはいられない。